研究ノート

東京大学所蔵「留学生関係書類」の一端

――申報書・報告書類――

谷本宗生

現在、東京大学史史料研究会を中心として東京大学史史料室所蔵「留学生関係書類」の目録化作業が進められている。[1] 作業の対象とされた「留学生関係書類」は、一八八三年から一九一〇年までの時期の全七簿冊からなる。[2] ここに収録されている史料の件数（目次とされるもの）は、四七一件にもおよぶ。その内容は、学科人物選定、修学場所、派遣期、転学願、学資手当、巡回巡歴、実地研修、会議出席、学生進退、留学生表、申報報告などである。本稿は、この作業過程で興味深いと思われた史料の一端、とくに申報書・報告書類について言及し、若干の考察を行いたい。

留学生の申報書は、一八八二年の官費留学生規則で文部省への提出を義務づけられたものである。申報書の内容は、修業場所、受学教師、修業課目、受業料、旅行、休業、試験成績、学位褒賞、学資金、受領高である。たとえば、難波正の申報書（一八八三年一月一一日付け）をみると、修業場所は「『コレージュ、ド、フランス』物理学実験室」、受学教師は「物理学教授『マスカール』氏」、修業課目は「高等物理学中電気及磁気ヲ専攻ス」と項目ごとに端的に記されている。ここにある人物は、榊俶、渡辺渡、九里龍作、和田垣謙三、小藤文次郎、難波正、飯島魁、三浦守治、緒方正規、小金井良精、白石直治、佐藤三吉、青山胤通、藤沢利喜太郎、下山順一郎、高橋順太郎、中沢岩太の一七名である。申報書の一覧は、次表の通りである。

また、渡辺渡の申報書には附録（申報附書）がつけられている。この申報書附録から、留学生渡辺渡の修学状況だけではなく、渡辺の学問形成などを察することができる。ここに、ドイツ留学生理学士渡辺渡の申報書附録の一つを示す。渡辺渡は、一八七九年東京大学理学部採鉱冶金学科を卒業し、同理学部教師となり、一八八二年ドイツ留学を命じられている。

人　　名	専攻科目	簿冊番号	原　　丁	日　　付
榊　　俶	精神病学	G12		1883. 1.30
		G13	124	1883. 7. 5
		G13	140	1884. 1.31
渡辺　　渡	採鉱冶金学	G12		1883. 1.31
		G13	118	1883. 7.31
		G13	154	1884. 1.28
		G13	163	1884. 7.31
		G13	270	1885. 2.25
九里龍作	機械工学	G12		1883. 1.16
		G13	128	1883. 7. 9
		G13	150	1884. 1.14
和田垣謙三	理財学	G12		1883. 1.30
		G13	116	1883. 7.20
小藤文次郎	地質学	G12		1883. 1. 4
		G13	134	1883. 8.10
難波　　正	物理学	G12		1883. 1.11
		G13	136	1883. 8. 6
中沢岩太	製造化学	G13	153	1884. 1.10
飯島　　魁	動物学	G12		1883. 1.25
		G13	152	1884. 1.10
三浦守治	病理学	G12		1882.12.31
		G13	135	1883. 7. 1
緒方正規	衛生学	G12		1883. 1. 7
		G13	133	1883. 7.29
小金井良精	解剖学	G12		1883. 1.31
		G13	132	1883. 7.30
		G13	143	1884. 1.31
白石直治	土木工学	G13	112	1883. 8.20
		G13	148	1884. 2. 1
佐藤三吉	外科学	G13	117	1883. 7. 7
		G13	139	1884. 1.30
青山胤通	病理学	G13	126	1883. 7.18
藤沢利喜太郎	数学	G13	127	1883. 6.29
		G13	146	1884. 1.10
下山順一郎	製薬学	G13	141	1884. 1.30
高橋順太郎	薬物学	G13	144	1883. 1.
		G13	145	1883. 7.30

凡　例

一　漢字は、常用漢字があるものはそれを用いた。

二　合字は、カタカナに改めた。

申報書附録

別紙申報書ニ記載有之候学課目ノ義ハ概テ曽テ東京大学ニ於テ学修シ得タルモノニ御座候得共当地弗菜堡大学校ノ義ハ鉱山科専門ニ於テハ世界第一等ノ大学ニ候得ハ学科年々高尚ニ進ミ我東京大学ハ之ニ比セハ到底予備校タルニ過キ不申候独リ東京大学ノミナラス英国ニ於テ鉱山学校ノ第一位ヲ占メタルスクールヲフマインノ如キモ亦然リ何ントナレハ該学校ヲ卒業セル諸氏ニシテ当地ノ大学校ニ入学セルモノニ接シテ其学力ヲ試ムルニ我理学士ノ学力ハ却テ右諸氏ニ勝ル、モ敢テ一歩ヲ譲ルコトナキヲ証スレハナリ又英国鉱山校ノ課目中東京大学課目ノ高尚ナルニ及ハザルモノ間々コレアリ以テ日本教育ノ較ニ上進シタルヲ知ルベシ然レトモ前ニ記セルガ如ク之ヲシテ弗菜堡大学校ニ比セハ実ニ低度タルヲ免レス故ニ一旦東京大学ニテ学ビタル課目ト雖モ之ヲ復修スルノ利益ハ決シテ些少ナラザル義ニ御座候

当大学校諸教授ノ考錬ニシテ教授ノ方法ニ意ヲ注スルノ切ナル未タ曽テ日本ニ於テ見聞セザル所ニ御座候（教授法ノ細目ハ他ノ諸課目ヲ覆修シタル後申報可仕候）日本ニ於テ或ハ当学校ヲ目シテ実地ニ偏倚スト言フモノアリ実ニ大ナル誤解ナリ尤モ此地ハ鉱山ノ為メニ開ケタル処（日本ニテ佐渡ノ相川但馬ノ生野ニ於ルガ如シ）ナレハ地下ハ概ネ坑冗ナラザルハナク近傍ニ又完全ノ冶金場アリ故ニ実地ニ就テ学フニ至便ナルノミ何ンソ学校ヲ目シテ実地ニ偏スルモノト言フ可ン哉其教科ハ実ニ理論ノ最高尚ナルモノト確認仕候其教授法ノ完全ナル外又殊ニ感服スヘキ件ニ有之候其一ハ授学上緊要ノ物品即チ図書、模型、標品ノ類ヲ備フルニ吝ナラザルト一ハ事務ノ簡易ニシテ善ク整頓シタルノ件ニ御座候先ツ書籍ハ新旧ノ別ナク総テ良書ト称スルモノハ一モ漏ラサズシテ之ヲ図書館ニ備ヘ各生徒ハ時日ヲ期シテ之ヲ借受シ得ルノ便アリ模型ハ校内ニ常ニ模型師ヲ雇ヒ置キ諸学科ニ関スル一切ノ器械物品等ヲ寸尺ニ照ラシテ彩色ノ活動ニ至ル迄毫モ真物ト異ナラサルモノヲ編製セシメハ以テ講義ヲ助クルノ便ニ供シ一ハ以テ諸工場ヲ計画スルノ際コレガ参考ニ供セシム又鉱物、古生物等ノ標品ヲ集ムルニハ校内ニ一ノ商人アリテ此物常ニ各地ノ鉱物等ヲ蒐集シテ学校ニ納メ傍ラ生徒ノ購求ニ応スルノ方アレハ故ラニ採集員ヲ学校ヨリ派出セシムルガ如キ迂且ツ出費多キノ患無之候以上陳述仕候如ク授業上ニハ毫モ出費ヲ厭ハスシテ却テ他ニ節減スル所有之様ニ存候

右聊カ見聞仕候件々申報仕候頓首

明治十六年一月三十一日　　渡辺渡　印

文部卿福岡孝弟殿

ドイツのフライベルク鉱山大学校で修業した渡辺は、東京大学での教授の在り方と比較して、留学先での優れた点について申報している。このなかで、当地では教授上に必要な物品はすべて用意されていると賞賛している。書籍は、新旧の別なく図書館に所蔵されていて、模型は模型師が雇われ真物同様に編製され、標品は校内に商人がいていつでも求めに応じることができる。さらに詳細な見聞については、このほかの申報附書で展開している。たとえば、炭坑瓦斯爆発予防の渡辺の見聞などは、日本の採鉱冶金学の形成史研究からみても貴重な史料と考えられる。

以上の申報書類のほかに、留学生の報告書がある。願出や簡略な届出を除く報告のある人物は、井上哲次郎、坪井次郎、本多光太郎外である。

簿冊番号	原丁	件名	発
G 14	一八二	〔教育上の報告〕	井上哲次郎
G 14	三四二	第七回万国衛生及デモグラヒー会参会報告	医科大学助教授医学士坪井次郎
G 18	一七二	故文部省外国留学生大久保栄死後処分報告（第一回）	巴里在住文部省外国留学生理学博士本多光太郎外六名

このなかで、ドイツ留学生井上哲次郎の報告書（回覧の写し）を復刻する。井上哲次郎は、「真誠哲学ノ興隆ヲ謀ラント欲スル」（一八八三年七月付け、東京大学総理加藤弘之発専門学務局長文部大書記官浜尾新宛の留学生派遣回答案）ため、一八八四年ドイツへ派遣されている。

凡例

一　漢字は、常用漢字があるものはそれを用いた。
二　合字は、カタカナに改めた。
三　朱記訂正を用い、その箇所は［　］で示した。

本年以後欧洲滞在ノ間本邦教育上ニ裨益アル事項ノ報告ヲ嘱托セラレタルニ就キ今回先ツ徳国哲学諸科ノ教授法ヲ叙述シ其間往々卑見ヲ陳述仕候処是レハ甚タ慮外ノ事ノ様ニ御坐候得共此ノ如ク彼此対照シテ其得失如何ヲ推究スルニ非サレバ報告書モ甚タ其効能少キモノニ御坐候間此儀ハ何卒御諒察有之度候其他教育上ニ関シ報告可仕事夥多有之候間追々報告可仕候間宜敷御高裁被下御差支無之ハ幾分カ御採用有之度候敬具

徳国ニテハ哲学ハ啻ニ大学ノ一分科タルノミナラズ又中学ニアリテモ頗ル肝要ノ地位ヲ占メ居ルモノナリ先ツ大学ノ方ヲ挙ゲテ之ヲ論センニ二十大学中哲学ノ科目ナキ所ハ一モ之ナク又一大学ニ多キハ十三名ノ哲学教授アルモノアリ即チ［伯］林大学ノ如キ是レナリ其他僻地ノ大学ニ至リテモ少クモ二三名ノ哲学教授ナキ所ハ未タ之アラサルナリ而シテ科目ニハ大抵純正哲学及ヒ心理哲学倫理哲学論理哲学并ニ哲学史ノ外法理哲学宗教哲学審美哲学言語哲学社会哲学等アレトモ是レモ又教授其人ノ意思如何ニ因テ或ハ変更シ或ハ細別スルコトアリ例ヘハ哲学史ヲ近世ト古代トニ分チ或ハ心理哲学ヲ人種一般発達上ヨリ講究シ或ハ各個ノ心意作用ヲ科学法ニ由テ推論スル

カ如キ是レナリ此ノ如ク哲学モ種々ニ区別類別シテ教授スルコトユヱ学生モ亦各々其性ノ傾ク処ニ従テ学ヒ其意ノ向フ所ニ因テ進ミ大ニ自由発達ノ路ヲ得ルコトナリ教授ハ一週講義スルコト大抵六七回ニテ極少キハ二三時間極多キハ十二三時間ナリ十五時間以上講義スルコトハ決シテ之ナキユヱ自ラ益々其専門ノ学ヲ推究スルノ余暇ヲ得一ハ学生ニ対シ浅薄鹵莽ノ講義ヲ為サヽランコトヲ務メ一ハ善良ノ著述ヲ為シテ社会一般ヲ裨益センコトヲ図ルヲ得ルナリ抑々大学ハ元ト学生ノ為メニ設クルモノナリト雖モ教授モ亦邦国ノ要地ヲ占ムルモノナレハ力所及其便宜ヲ図リテ自由ニ其学ヲ推究セシメ充分ニ其説ヲ世ニ発表セシムルコト邦国一般ノ教育上ニ取リテ極メテ重要ナルコトナリトス

哲学諸科ノ中心理倫理論理并ニ哲学史ノ如キハ啻ニ哲学専門ノ士ニ必要ナルノミナラス又又学生一般ニ取リテモ其概要ヲ学修スルコト極メテ切要ナリトス是ノ故ニ徳国諸大学ニテハ三四十年前マテハ医学ヲ専修セント欲スルモノモ法学ヲ専修セント欲スルモノモ皆一般ニ初メノ一二学期ハ必ス先ヅ哲学ヲ講究スヘキコトナリキト云フ今日ニ至リテモ神学法学史学言語学等ヲ学修スル学生中ニ哲学ヲ兼学スルモノヽ随分多キハ即チ其余習ニテ甚タ善良ナル方法ト謂フヘシ何故ナレハ哲学ハ蒙蔽ヲ褫奪シ智識ヲ開発スルノ学ナルユヱ凡ソ学問ヲ始ムル第一着ニ其一般ヲ学修スヘキハ事ノ最モ見易キモノナリ即チ心理哲学ニ拠リテ己カ心意ノ作用ヲ知リ倫理哲学ニ拠リテ己カ行為ノ是非ヲ察シ論理哲学ニ拠リテ己カ言論ノ正邪ヲ質シ哲学史ニ拠リテ先輩ノ教育ヲ考フルガ如キハ如何ナル人モ一通リ弁ヘ居ルヘキコトナルハ言ハズシテ明ナルコトナリ然ルニ若シ然ラスシテ初ヨリ唯工学化学金石学等ノ如キ一学科ノミヲ学修スルトキハ其才能如何ニ拠リテ其学修スル処ノ学科ニハ随分上達スベケレトモ知識ノ発達之ニ伴フテ進歩セサレハ仮令ヒ後来一個ノ専門家トハナルヲ得ヘキモ智識ト手采トヲ具有セル一個ノ人物トナルコトハ甚タ覚束ナキコトナリ故ニ多ク智識ト手采トヲ具有セル人物ヲ養成センニハ大学ノ学生ヲシテ第一着ニ哲学諸科ノ中心理倫理論理并ニ哲学史ノ如ク一般ノ人ニ最モ切要ナルモノヲ学修セシムルノ法ヲ設クルニ如カサルナリ然レトモ厳重ナル規則ヲ以テ之ヲ一定スルトキハ却テ学生ノ自由発達ノ路ヲ妨クルコトトモナリ其他又別ニ種々ナル事情アルカ為メニ徳国ニテハ今日ハ全ク之ヲ学生ノ自ラ欲スル所ニ任スルコトトセリ然レトモ智識ノ発達ヲ助クル所ノ哲学ヲ学修セント欲スルモノニハ即チ其法アリテ存シ何学専門ノ学生ニ論ナク凡ソ学生タル者ハ随意ニ哲学諸科ニ関スル講義ヲ聴クヲ得ヘキナリ

右ニ陳述セルカ如ク哲学諸科ハ一般学生ニ取リテモ欠クベカラサルホト重要ノ学科ナレトモ教授法宜シカラサルトキハ労シテ効ナキノ恐ナキニ非ザルナリ即チ第一着ニ注意スヘキハ学問進歩上ノ事ニテ凡ソ今日専門ヲ分チテ研究スル諸学士ハ日ヲ逐ヒ月ヲ経テ規律ヲ精確ニシ区域ヲ拡充シ陳套ヲ化シテ新鮮トナシ浅薄ヨリ進デ深邃ニ入ルコトユヱ一切ノ学科ハ草木ノ生長シ人獣ノ発達スルカ如ク漸々其旧来ノ面目ヲ改メテ益々善良ノ途ニ就キ哲学諸科ノ如キモ近世殊ニ旧套ヲ蟬脱シテ一種斬新ノ傾向ヲ生シタルコトユヱ今日ニシテ再ヒ古人ノ誤リテ彷徨シタル迷路ニ入ラサランコトヲ務メザルヘカラサ

ルナリ例ヘハ心理哲学ノ如キハ古来唯々一室ノ中ニ坐シ沈思冥想以テ自己ノ心意ノ作用ヲ窮索シ此ニ由リテ心意一般ノコトヲ推論スルコトナリシカ徳国ノ碩学フェヒネル ヴント諸氏ガ出デヽヨリ全ク科学法ニ由リ百般ノ機器ヲ用ヒ種々客観的ノ試験ヲ為シテ講究スルコトトナリタレバ今ヨリ以後ハ此種ノ講究法ヲ採用スヘク已ニ腐朽セル旧株ヲ擁護スヘカラサルハ論ヲ竢タサルコトナリ又人種一般発達上ヨリ心理作用ヲ講究スルヲ人種心理ノ学ト称ス是レ全ク徳国現今ノ哲学家ナル スタインタール ラツアルス諸氏ニ始マル処ノ学科ニテ啻ニ古人ノ夢想セサリシ新区域ナルノミナラス今日ニアリテモ徳国ノ外ハ大学ニ於テ之ヲ教授スルコトハ未タ之アラサルナリ然レトモ其後来之ヲ講究スル者ノ各国ニ起ルヘキハ今ヨリ之ヲ預言スルヲ得ヘキナレハ我邦ニテモ漸々此学ヲ興スヘキナリ

次ニ心理哲学ヨリ一層社会全体ノ上ニ関係ヲ有スル学科ハ倫理哲学ナリ倫理哲学ハ徳国大学ニテハ多クハカント氏ニ拠リテ教授スレトモ又教授其人ノ意見ニ由リテ幾分カ増減取捨スルコトモアリ又全クカント氏ニ本カズシテ或ハ自家独得ノ倫理ヲ説キ或ハ他ノ先輩ノ倫理ヲ採ルコトアリテ一定セリトハ謂フヘカラサルナリ抑々倫理哲学ハ大別シテ二種トナス一ヲ理論的ノ倫理トシ一ヲ実践的ノ倫理トス実践的ノ倫理ハ其主義ノ是非如何ヲ論セス已ニ一定セル教旨トシテ教ユルモノニテ即チ中小学ニ欠クヘカラサル科目タリ理論的ノ倫理ハ倫理ノ本源ヲ推究シテ古来ノ教ト雖モ決シテ不問ニ置カサルモノニテ即チ大学ニテ始メテ講述スルヲ得ヘク中小学ニテハ決シテ此種ノ倫［理］ヲ提出スヘカラス但々理論的倫理ノ範囲中ニテ略々帰一セル要点ヲ採リテ教授スヘキナリ徳国ニテハ中小学ノ倫理ハ耶蘇教ニ取リ固ヨリ其教旨ノ理非如何ヲ論スルコトナケレトモ大学ノ哲学部ニ至リテハ大抵避ケテ論セサル学理ナキナリ此ノ如ク理論的ノ倫理ト実践的ノ倫理トヲ分ツコトハ何レノ国ニモ必要ナレトモ殊ニ我邦ノ如ク中小学ニテ宗教ヲ教授セスシテ純粋ナル倫理ヲ教授スル所ニアリテハ一層大切ナルコトナリ何故ナレハ教員タルモノニ種ノ倫理ヲ区別セスシテ動モスレハ混同シテ教授シ為メニ深ク生徒タル者ノ本来ノ良心ヲ破壊スルノ恐アレハナリ然レハ若シ姑ク孔孟二氏ノ教旨ニ従ヒ孝悌忠信ノ大要ヲ実践的ノ倫理トシテ教エナハ実ニ鴻益アリテ些ノ弊害モ之ナキナリ如何ナル倫理学者モ父兄ヲ軽侮シ長老ヲ蔑如シ朋友ヲ欺騙スヘシトハ説カサルナリ若シ之ヲ説クモノアラハ名ヅケテ倫理学者トハ謂フヘカラサルナリ但々孝悌忠信ノ行ヒ方ニハ種々アリテ或ハ暗昧ノ心ヨリシテ過度ニ陥キルコトアリ即チ自身ノ肉ヲ切断シテ飢エタル父母ニ喰ハシメ之ヲ以テ孝行ナリト思惟スルカ如キ又誠実ノ心ヲ以テ主君ニ事フルハ善キコトナレトモ忠ノ真意ヲ誤リテ平身低頭遂ニ奴隷ノ如キ卑劣ナル心ヲ生シ従テ自主独立ノ精神ヲ殄滅スルカ如キ是レナリ是等ノ事ハ即チ時勢ノ有様ニ従テ改良ヲ行フヘキ所ニテ実践的ノ倫理モ今日ハ頗ル中正不偏ノ途ニ就キタリト謂フベシ

実践的ノ倫理ト同シク普ク社会ニ流布セシムヘキ学科ハ論理哲学ナリ然ルニ論理哲学ニ古来二種アリ一ハアリストテレス氏ニ淵源スルモノニテ正式論法ト云ヒ一ハカント ヘーゲル二氏ニ胚胎スルモノニテ知識方法ト云フ正式論法ハ固ヨリ哲学者ニ必要ナリト雖モ其他

ノ人ニ取リテハ未タ知識方法ノ実益多キニ及ハス知識方法ハ知識ノ本源ヨリ説キ起シ来リテ凡ソ事物ノ道理ヲ推論暁得スルトキニ謬誤ニ陥キラサル様ニ詳細ニ其方法ヲ講究スルノ学科ニテ如何ナル学者ニアリテモ如何ナル論士ニ取リテモ其要領ヲ学修スルコト最モ緊要ナリトス是レ亦啻ニ学者論士ニ限ルノミナラス又社会一般ニ欠クヘカラスト謂フヘキナリ総テ我邦ノ人民ナトノ事物ニ就テ批評窮索スルノ力ニ乏シク一モ二モ其是非如何ヲ問ハスシテ欧米人ノ所為ヲ模擬スルノ外技倆ヲ有セサルカ如キ状態ヲ露ハスハ畢竟自己ノ精神中ニ論理的ノ智識ナキニ由ル若シ論理的ノ智識ヲ養成セハ自己ノ精神中ニ可非ヲ判断シ事物ヲ創造スル一種ノ活動力ヲ発生スルヲ得ヘキナリ思フニ上古ヨリ今日ニ至ルマテ東西国ヲ成スモノ幾千アルヲ知ラス然ルニ学問技芸等凡百ノ事物ヲ創成興起セシコト古ノ希臘ト今ノ徳逸トノ二人種ニ及ブモノアラス即チ羅馬并ニ方今欧米各国ノ文明ハ実ニ希臘ヨリ得来ル而シテ今日ニアリテハ又徳澳英米等ノ如ク文物旺盛ナル国ハアラス是レ皆一箇ノ徳国人種ノ分散移転セルモノナリ然ルニ溯リテ之ヲ考フルニ希臘徳逸二人種ホト哲学ニ精通シ殊ニ論理的思想ニ富メルモノハ未タ曽テ之アラサル所ニテ又論理的思想ノ此二人種ヲシテ自己ノ脳中ヨリ事物ヲ剏成原造シ出スノ力ヲ涵養セシメタルコト実ニ大ナリト謂フヘシ此ニ由リテ之ヲ観レハ論理哲学ニ由リテ力所及論理的ノ思想ヲ我邦ノ社会一般ニ伝播シ徒ニ欧米人ノ所為ヲ模倣セスシテ漸々自己ノ精神中ニ剏成原造ノ力ヲ発達セシムベキコト論ヲ竢タサルナリ

以上逐一論述セル三学科即チ心理倫理并ニ論理ノ大学ニ欠クヘカラサルハ勿論ノコトニテ又中学ニモ必要ナル学科ナリ倫理ハ徳国中学ニテハ固ヨリ全ク耶蘇教旨ニ拠ルコトナレトモ哲学要領及ヒ心理論理ノ大綱ハ近世多クトレンデレンブルグ氏ノ哲学ニ拠リテ教授スルコト猶ホ法国中学ノ哲学書類クゼァン氏ニ拠ルガ如シ然レトモ是等ノ事ハ国々ノ歴史風俗ニ従テ多少ノ差異ナカルベカラズ即チ我邦ニテハ哲学要領ハ当分ノ中困難ニ過クルノ恐レアルカ故ニ未タ急ニ之ヲ学科中ニ設クベカラサルカ如ク又倫理ハ前ニモ述ヘタルカ如ク姑ク我邦ニテ古来崇奉セル孔孟ノ教旨ニ本ツキテ実践的ノ倫理ヲ教授スヘキガ如キ是レナリ之ヲ要スルニ心理倫理并ニ論理ノ三学科ハ徳国中学ニ存スル所ニテ又我邦ニアリテモ中学ニ必ス其科目ヲ設クルヲ要ス然レトモ教授法ニ至リテハ決シテ同一轍ニ出ヅヘキニアラス是レ啻ニ倫理ノミナラス心理論理ト雖モ我邦ニテハ唯々学問一般進歩ノ景況ヲ参考シテ教授スヘク必スシモトレンデレンブルヒ氏杯ノ学ニ拠ルヲ須ヒサルナリ

其他純正哲学哲学史并ニ法理宗教審美言語社会等ノ哲学諸科ハ中学ニハ固ヨリ高尚ニ過クト雖モ大学ニハ決シテ欠クヘカラサル学科ニテ已ニ前ニモ述ヘタルカ如ク徳国二十大学ニテ之ヲ教授セサル所之ナキナリ遥ニ察スルニ我邦大学ノ如キモ已ニ略々是等ノ科目ヲ具備セルカ如シ然レトモ教授ノ方法科目ノ増減等ハ国々ノ歴史風俗ニ従テ頗ル差異ナカルヘカラス即チ我邦ニテハ先ツ我邦及ヒ印度支那等ノ事実ヲ参考シテ是等哲学諸科ヲ講スルコト最モ切要ナリ若シ然ラスシテ徒ニ異邦ノ人カ異邦ニテ教授スル方法ヲ其マヽ我邦ニテ沿襲スルカ如キハ教育ノ方法ヲ誤マレルノ最モ甚シキモノナリ例ヘハ哲

学史ノ如キハ西洋ニテハ唯々希臘以来哲学ノ沿革シ来レル歴史ヲ講スレトモ我邦ニテハ先ツ第一着ニ東洋ノ哲学即チ儒仏道三教ノ来歴ヲ講スヘキナリ若シ然ラサルトキハ他国ノ古代ノ哲学ヲ学修シテ近ク己ト接近スル所ノ最モ肝要ナル教法ヲ知ラサルノ弊アリ審美哲学モ亦之ト同様ナリ蓋シ東洋ノ美術ト西洋ノ美術トハ大ニ其趣ヲ異ニシ全ク其源ヲ殊ニス然ルニ若シ我邦ニテ唯事実ヲ西洋ノ美術ノミニ徴シテ審美哲学ヲ講スルトキハ我邦ノ美術上ニハ左程益ナク或ハ却テ之カ為メニ本来固有ノ妙処ヲ害スルヤモ斗リ難シ故ニ西洋ノ美術ヲ参考スルハ固ヨリ好キコトナレトモ先ツ我邦ノ美術ヨリ講シ始メサルヘカラス言語哲学ノ如キモ我邦ニテ先ツ西洋人ノ未タ精通セサル東洋各国ノ言語ヲ比較推考シテ其相互ノ関係連絡等ノ講スルトキハ学生ニ取リテモ興味モ多ク又発見スル所モ多カルヘシ然ルニ若シ唯々西洋古代ノ言語ノミヲ講スルトキハ仮令ヒ学生タル者カ畢生ノ力ヲ尽スモ西洋大家ノ糟粕ヲ嘗ムルニ止マリ我邦ノ学問ニモ利スル所少ク又学問社会一般ニ対シテモ些ノ進歩ヲモ添ヘ得ルコト覚束ナカルヘシ是故ニ我邦ノ言語学生ハ自ラ奮進シテ東洋各国ノ言語ヲ討究シ少クモ是等東洋ニ関スル学問ニ於テハ西洋人ノ右ニ出ツルコトヲ務メ追々自ラ進ンテ教授トナリ始メテ東洋比較言語ノ学科ヲ講スヘキニ若シ然ラスシテ異邦人ニ就テ自国ノ言語哲学ヲ学修スル如キコトアラハ倒行逆施ノ甚シキモノニテ実ニ本邦ノ恥辱ナリト謂フヘシ此ノ如ク本邦人カ未タ自国ノ言語哲学ヲモ講スル能ハサル位ナレハ姑ク此学科ヲ設ケスシテ如何ニ拙劣ナリトモ本邦人中ニ此学科ノ教授トナルヘキ資格ヲ有スル者ノ出テ来ルヲ竢ツニ如カサルナリ法理哲学ノ如キハ殊ニ事実ヲ自国ノ歴史風俗ニ徴シテ講スヘキモノナレトモ或ハ取捨折衷スルノ力ナク徒ニ西洋ノ書ヲ濫信シ自国古来ノ制度ヲ不問ニ置キ如何ナルコトニ就テモ直ニ西洋ノ法律ヲ其マヽ採ラントスルノ傾向ヲ生スルコトナキニアラス果シテ然ラハ自己ノ衣服ヲ脱シテ直ニ他人ノ衣服ヲ着ラントスルト同シク毫モ自己ニ適合セサルヲ見ン徳国ノ法律ハ徳国人ニ適合スル様ニ歳月ノ久キヲ経テ発達シ来レリ英国ノ法律ハ英国人ニ適合スル様ニ歳月ノ久キヲ経テ発達シ来レリ法国ノ法律モ伊国ノ法律モ皆然リ然ラハ我邦ノ法律モ本邦古来ノ事実ヲ参考シテ定ムヘク決シテ他国ノ法律ヲ其マヽ採ルヘキニアラサルカ故ニ法理哲学ハ固ヨリ此旨意ニ本ツイテ講セサルヘカラサルナリ又宗教哲学社会哲学ノ二学科モ之ト同シク東洋ノ事実ヨリ講シ始ムヘキコト復タ此ニ細論スルニ及ハサルヘシ此ノ外教育学ノ如キモ徳国ニテハ大抵哲学者ノ講スル学科ニテ哲学諸科中ノ一トスルモ不可ナルナキカ如シ然ルニ教育学ニ二種アリ一ハ哲理的ノ教育学ニテ万国普通ノ教育法ヲ説クモノナリ一ハ応用的ノ教育学ニテ即チ其国ノ事情如何ニ因テ教育法ヲ論スルモノナリ此ノ応用的ノ教育学ハ国民ノ結合心ヲ養成スルニ最モ要用ナル学科ナリ是ヲ以テ徳国大学ニテハ殊ニ徳国ニ適切ナル応用的ノ教育学ヲ講スルコトナリ然レハ我邦大学ニテモ殊ニ我邦ニ適切ナル応用的ノ教育学ヲ講スヘキナリ然ルニ若シ他国ニ用ユル所ノ教育学ヲ完全ナリト見做シテ其マヽ直ニ我邦ニテ之ヲ教授スルカ如キアラハ決シテ其法ヲ得タルモノニアラス矢張我邦ノ歴史風俗ニ関スル事実即チ君臣ノ関係父子ノ情愛孔孟ノ教旨等大ニ欧米ニ異ナル所アルヲ詳細ニ斟酌商量シ

テ応用的ノ教育学ヲ講シ此ニ由リテ益々我邦固有ノ長処ヲ養成シ又同時ニ其短処ヲ矯正シ漸ヲ以テ国民ノ結合心ヲ固フスルコトヲ務メハ即チ是レ幾杯ノ水ヲ異邦ヨリ汲ミ来ルニアラスシテ更ニ其源泉ヲ我邦ニ開クト同シク徒ニ徳国教育法ノ皮相ヲ蹈襲スルニアラスシテ全ク其精神ヲ採用スルモノナリト謂フヘシ

明治廿一年十月初九　　井上哲次郎

文部大臣子爵森有礼殿

この井上の報告書に関しては、『東京大学史紀要』第一一号（一九九三年三月）で福井純子が紹介した井上哲次郎の日記、『懐中雑記』第一冊のなかに、その経緯が記されている。(3)

○〔一八八八年五月〕三日、日本文部省ヨリ「本邦教育上ニ裨益アル事項ノ報告ヲ嘱托シ手当トシテ銀貨四百円交付ス」トノ指令ヲ領収ス、

○〔同年十月〕九日、森文部大臣ニ報告書ヲ送ル、

＊〔　〕は、谷本が記入。

この記述から、井上は文部省から教育上の裨益事項の報告を手当金つきで嘱託されていたことがわかる。嘱託の指令をうけてから、五ヵ月後に報告書を提出していることになる。

井上は、この報告書においてドイツ大学の哲学諸科の教授法を叙述し、それと対照して日本での教授法を主張している。教授の方法はその国の歴史風俗にしたがって当然差異があり、日本では日本の事実等を参酌して諸科を教授することが重要としている。

井上の報告書のなかで、いくつか興味深い点を指摘すると次のものが挙げられる。一つは、大学は学生のためだけではなく教師のためにもあるとした点である。大学での講義時間数も、専門の学問研究が十分できるだけのゆとりが絶対に必要であり、それは学生の講義にとってもまた善良なる著述を行い社会一般の裨益をはかるうえでも大切であるとしている。一つは、一般教養としての哲学の重要性を主張している点である。哲学は、智識を開発するための学問として、すべての学問研究の第一着に学修すべきものとしている。一つは、ドイツ教育法の皮相ではなくその精神を採用するには、日本の歴史風俗に密接に関連する孔孟二氏の教旨に基づかなければならないと力説した点である。哲学諸科のなかでも、とくに実践的な倫理は中小学で孔孟の教旨に基づいて教授されなければ、生徒の良心が破壊される恐れがあると警告している。以上のような点は、日本の哲学・教育学等の学説史研究からみても重要と考えられる。

このように、申報書・報告書類など貴重な史料を有する「留学生関係書類」は、今後多くの研究者に利用されることが望まれる。

付記

実際の目録化作業は、東京大学史史料研究会会員の中野実（東京大学史史料室室員）が責任者となって、データーベース作成を高橋陽一（同室教務補佐員）、調査・パソコン入力を谷本宗生が担当した。

註

（1）その成果の一端は、平成四年度福武学術文化振興財団研究助成の報告書「明治前期派遣留学生の近代日本形成に果たした役割―東京大学を中心に―」（研究代表者伊藤隆）にあらわれている。

（2）「留学生関係書類」の概略については、中野実「沿革史料紹介(3)―海外留学生関係史料について―」『東京大学史史料室ニュース』第七号（一九九一・一一・二〇）、等参照のこと。

（3）福井純子「井上哲次郎日記　一八八四―九〇　―『懐中雑記』第一冊―」『東京大学史紀要』第一一号（一九九三年三月）。

（たにもと　むねお　日本大学大学院）